新仙鶴新撰

女房部　下

特別
イ 4
3163
67(2)

貴
14
3163
67(2)

歌仙部類抄

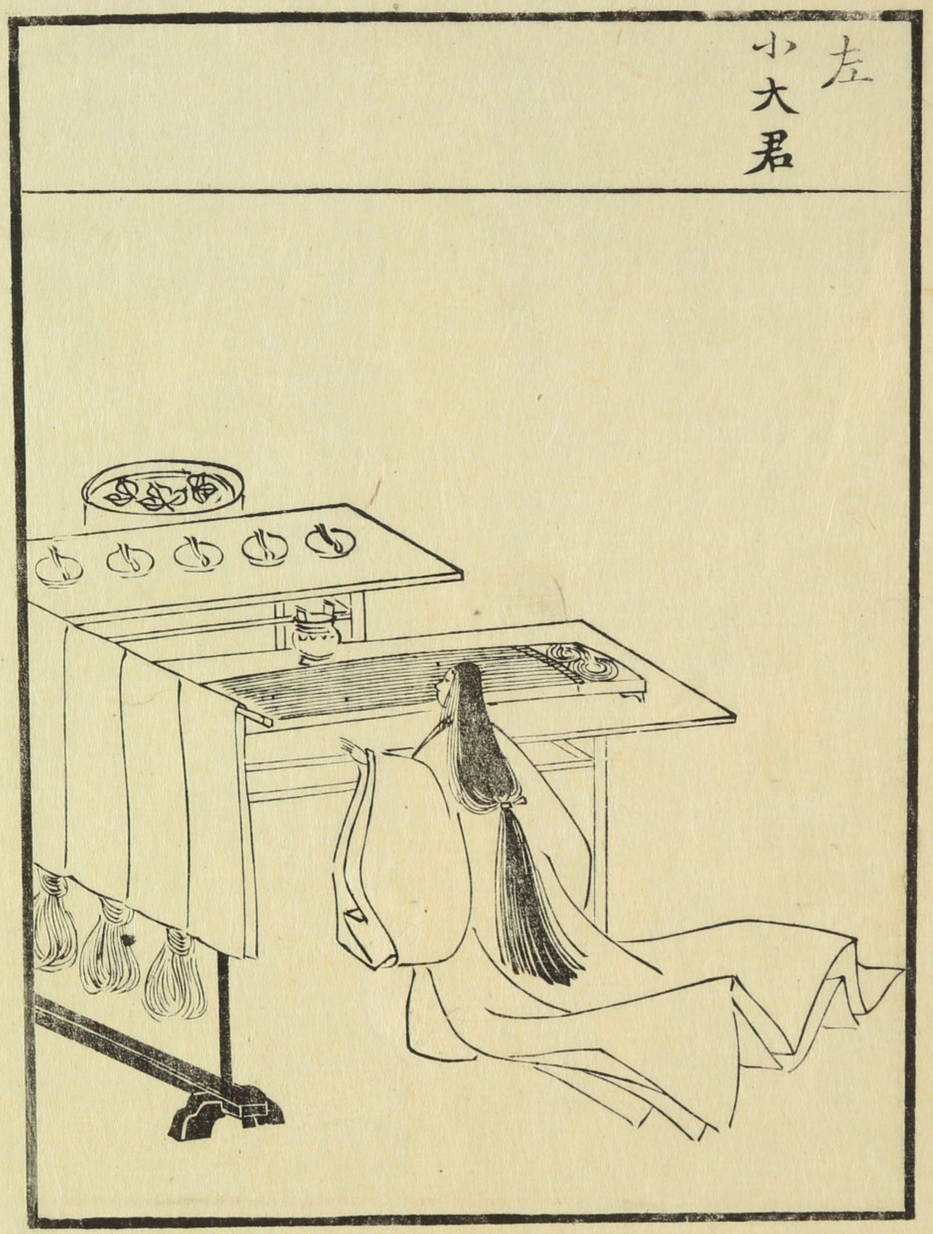
女房三十六人歌仙下

○三条院女蔵人左近

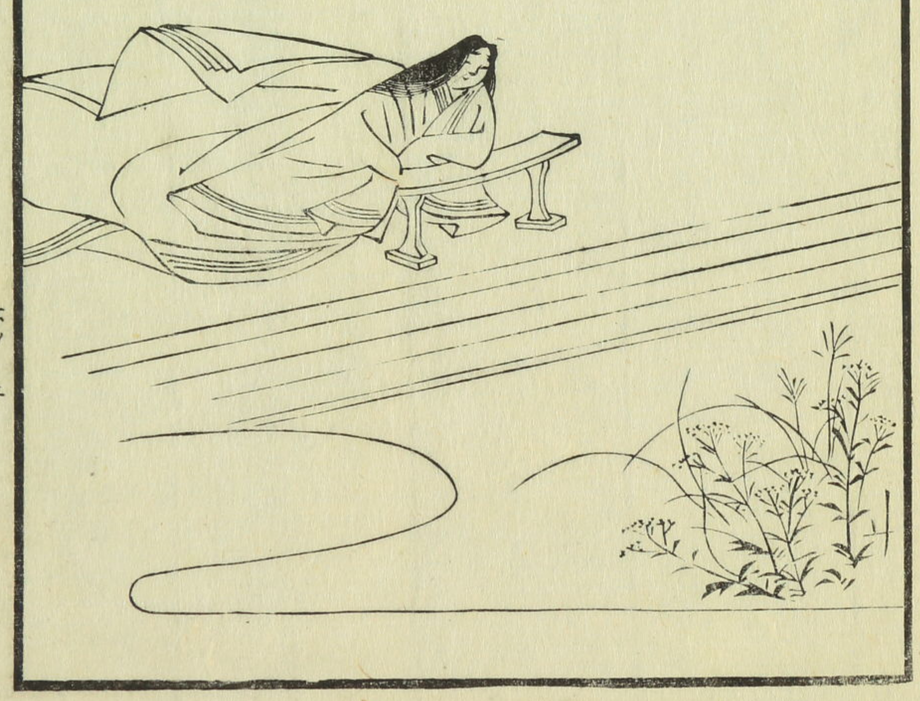
七夕のかゝぢと思ひ〳〵逢事をそのゝちなき名に立まがられ

此哥八千載集恋三に七月七日夜大納言朝光物いひわたるを
きゝて日いあるさまにて人のいひわたるをきゝて立は
わかれやかれ逢ことを七夕つめのかゝぢとよりしるのざう
てさやうにうらぶるを朝光朝臣とあらはしやうに人の
なをさ名をいひそへよるの心にて逢ことはなゝとをきまき

左
小大君



右
下野



なさ名はかりなくて、小袖などの如くあつかを二星とのつる
いつのをつくきなるか
三条院と申奉ハ御諱居貞、冷泉院第二皇子、御母、贈皇太后子起大政
大臣兼家公女なて、人皇六十七代帝也、左近、姓氏不詳、拾芥抄ハ小
大君、三条院坊御時、女蔵人左近とのゝ、撰集ハ左近とゝ、小大
君かゝもいでゝ、類語品彙と云書云、定基卿同云、小大君とハいくの、
答云、小大君とは、親王娘をすべて小大君と申ハとのゝ、又或書の細註
ニ、小大君ハ重明親王女とあり、ものゝ、上巻ニ出ル、齋宮女御
は御妹とのゝ、ものゝ思へば、すべて女蔵人ゝ云ハ、下臈なる職原抄の末に加へ、女官
の所ふ也、下臈諸侍、賀茂日吉社司等女也とあれば、夫ハ非ル

紫日記云、木の下をくゝさ、御格子まゐりなばや、女官ハいとゞ
さゝはず、義人まゐりなどいひ、ろふ、云云なるべ、ありて此ころ
女蔵人ゝ云ものハ今は女おすゝ忘なるべ云彩也、委ハ後ニ　されば
ものゝ身ハいやしけれど、歌ハ、ありては誉めるものゝて、元輔をはじめ
公任、實方、道信かは名ぶはゝ人ゝ、ちゆゝ志ゝ、くゝよみのすぐ
れ、家集ハみゝり、故もやゝ云任卿は三十六人撰ニえらぶゝれ
ゝるほどの人なれば押て知べし、大方此人ハ口うるゝて、をのゝき
姿を得られゝ、其うゝはをうつゝ云べし、　家集ハ同一人是ハ
藤大納言朝光卿也、此人ゝ、直衣すがゝて来てとよひ内ニ
うゝ、多くみゝり、
とのゝなり、これおきゝれて、巻柄のさゝやよ、だんれ法の法ゝる

刀をおきていわくこの三はばのもの音もせざりけれバかをりて
見くるゝ。さびしきもの女
おくぶかおのしまやけ刀もさびまけをさて久しくほどや
へるけむとてやりもまもられバ
うねおわくこのつるのしれる分をかりてけるのみまもる
高やわくこの舞　後拾遺集誹諧歌三条院の御時。人のとの
すきて近く侍りる人く枕をおくてまゐるをいでられバ書けて
けて殿上の侍のすゝくる
ゐしばやおぶろみのうらになるかをつかるこそ
ちさまくなれ。うつろぶみもさく嗅しとふを草枕す

いひ移しうり。家集まハさうはぶめ　はいでうるうこ。ゐ
やものみぜしさうぐりて　以上とあり。又家集まおほんいな
とりれ名をけるまを給ふるに三十一あり。ほ也ば一ッまは一欠字を
うさて。まみうぜうる流
とけむさば拾ひもうへむさぶれいけうずまうれるま
代いくぶそ　但し此歌。拾遺集まハまみ人　又
ちぶと有レど。此家集ぞ慥なる
いうまゐておくるあるまいふくとぶそこうぐをこ
やしと。此歌後拾遺集巻頭まゐぶしうり。但上古まはあれぐち人品
をうぶとみもあるれど。女方まハ勅撰ま巻頭。此人の外ある
ときなり。尤名誉さぐいなきものなり。形勅度古ゝ集まゐ。ゐ

○後鳥羽院下野

心ていてあきそきぬ　にのぐもがもとき老のねざめに

此歌ハ続後拾秋下ニ百首奉ル時、暁虫と題り、心ハ老ハ泣そろる物

ていさゝうれ夏ゝそれのなつのせゝんやうにのこつけがま

しくとぼし安きをよりて一年ハ内ニ秋ほどあるれなるを毛

れとなく秋のゝちに暁ばかりかなきハ虫ハ暁ちゝ森

ゝ行末みゞのゝ老ハ心細く物思ひまさるゝ涙ぐまれ

あゝしかる解ときけゞいとゞかゝるさせんうなるれば老の心を

思ひやりてなきてれそのことなりあるし深くよく情

と盡しゝる引也　されバいとゝ名高き歌と見えて、現在和

哥六帖、秋爪抄ニ其外諸書ニ多く見ゆ

後鳥羽院の御事ハ上巻ニ申せり、下野ハ作者部類ニ日吉祢宜允仲安

とあり、新古今ニ信濃とこのるも此人なりとそ、さて此人増鏡ニ昔

後鳥羽院ニさふらひ、下野の君ハさる女ハ古き人ニて云云ふ

と見えゝるばかりにて家集なゝ傳はらぬさまなれバいゝの

なかゝ人ともゝはくハ知ゝがたれど、歌ハ其代ニ勝れる人ゝ

みえて、新古今より、新続古今ニ至るまで、十四代ハ勅撰ニ一度

も洩れそれ事なく、負もうるまれ入うるまれバ

あふ人ニかくどのようぬおなが名ハいくるなるぬもさ

しけゝはら

あれまうけのゝうゝもきるぬ冥すゝておやけいさゝ

ひとのうちぢ
りあるとぶらひ中ゝまなるをの立むのゝたとて
人よかゝる事
月をぶらうそうぬ立をみゝそのをゝづ物をぶれ
うきゝうすむ
なぶりはぶめて人れをてをひ引いとおもしのの

○紫式部

みゝ人はくるとなるゝ夕ゝりなぞむけまき塩のの浦

此歌ハ新古今哀傷ニ出れはのみさゝをもぶゝ比ゝのゝ
ゝれ名あるゝゝ書る繪をみ侍てとあり一首ハ意也
見馴ゝ人れむなゝき煙となゝ時ハ夕ぶれより〻ぶなるゝ
ゝりをみてもおぶゝゝ思ハぶゝ塩
竈の浦ニ志おやくゝれ立上れる處書ゝる画をゝてよゝ
る也ゝ物をゝのゝ思ふ比のさまゝ見ゝゝ人なぶ
ひのゝゝは夫宣孝なぶれゝゝなぶ

此人ハ中納言兼輔孫藤原為時女ゝて左衛門佐宣孝妻上東門院の
女房也藤原氏の女故藤式部と云ぶ實ハ呼名ゝて紫式部と云ハ源
氏一部内紫上の事ゝ勝て書ゝ故れあゝ名ゝて後ゝ志の改ゝるゝ
はあゝゝ紫日記ニ云任卿ハ比ふかゝ比ゝゝゝ若ゝゝ
やゝゝゝゝのゝ孫ゝゝ自然ゝ其他名ハ高ゝな

右

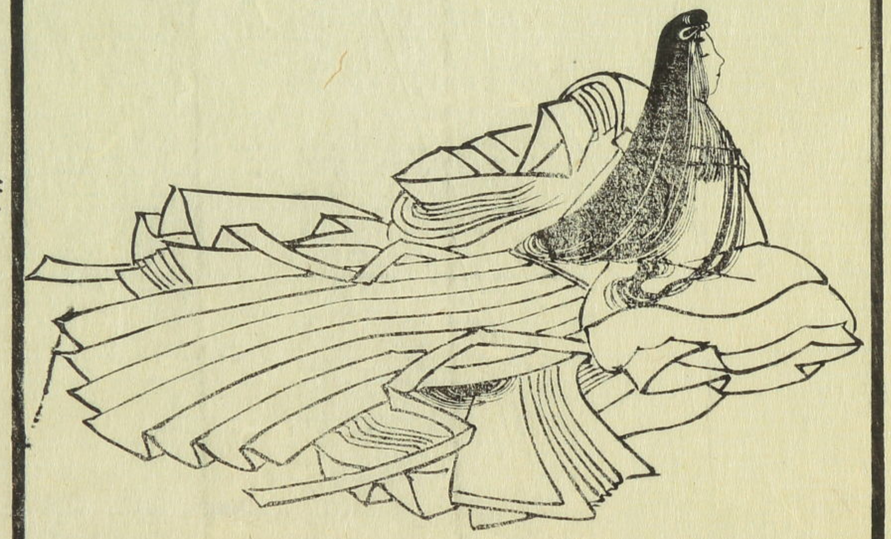
紫式部

土佐光信図

千秋縮図

右

弁内侍



なほ名はうるはしき也。そは同じ日記なれど、この人は日本紀を
よみ弱しづられ、殿上人なれど、ひたすらに日本紀の御房とぞ
付けられける。やがて下はいづれあらぬ。この物語の中にもかくのごとく同じ
異名なれど、まことの呼名まことあり。此名の子昔より諸説多うれど、皆ここに上巻に
色濃くこそ。名歌よりて、沖石はさねき、若草は宮内卿、
宇浦の丹後、なほ、いとふかくと同例也。なほ此人は事はこまかに云ん
よりは十牧世牧まで、事畫(コトツク)のれば、日記の方をいとふかく抜出(スキタ)て
甚つまはしきもの。紫日記なれど、うちはしの一条帝の源氏の物語
人よりまさる弱法師、関食(キコシメシ)ける。此人は日本紀をこそよく弱つべけれ。
まことにぞあるべしとぞ。ものをおぼえるはせをおぼえるとおぼえ

いみじうなむ。ありてん上などにいたりて、日本紀の御房
ぞ、いとくちをしくいとをしうぞ。これ古(フル)さのおんなのよくすて
ぶる。ぶみ、ものを、さる處。すてさえさのいでぬんよこの式
部紫式部の兄といふ人はまことはまて史記(フミ)と云書をよく行ひ時、さるか
らにぞ、いとうれ人兄はおそうよくこそ志(ワス)る所をも。あやしき
までぞ、くしく、ものかば、書(フミ)は心入る親ある時は口(クチ)をしうものうる
まてまことねこそ幸(ヒ)なうまけれとぞ常はなげくのみ。
夫(ヒト)を男ぶる。ものうる人はいとうるそや。ものうなるべれ。
よわ〳〵やう〳〵人のつて聞(キ)とて後、一(イチ)とうの本をぞ。書(カキ)
侍らず。いとてぞ。ひのきまく行まよみ〳〵書なるべ

抑も目にも見えぬものなりて侍しに、いよいよ心のつくる事なく侍しが、
ゆかりの人も傳へきゝて悪からんと恥かしさに、御屏風の紙に書き
たることをだに、よまぬがほし侍しを、宮(上東門院)のおまへにて文集(白氏)
のところどころよませ給ひなどして、さるさまの事しろしめさせま
ほしげにおぼいたりしかば、いと忍びて人のさぶらはぬもののひまひまに、をとゝし
の夏頃より、楽譜といふ二巻をぞ、しどけなくながらをしへ
きこえさせて侍るもかくし侍る。宮も忍びさせ給ひしかど、殿
(御)堂も、うへ(一条帝)も、けしきを知らせ給ひて、御書どもをめでたう
かゝせ給ひてぞ、殿は奉らせ給ふ云々(以上)。是らにてそのさけ
を知べし。　又十訓抄に云、上東門院の御方に、琴ひく人は今ま

おはしましけり。院紫式部に、此女房に琴ひくよし、ちかなれぬ名残によ
せ仰ごとありけるに、いそこれよりつかうまつれば、殊にほめさせ
たまひけるとぞ。されさきに緒のある處は、いちとすと申によりて、
思ひよられたりけるにや。名をば志ける人いと姉なり(以上)　又千載集
雑に上東門院に侍ける女房、さとにいでゝ侍りける。女房のもとよりそこ
のついでに筝つかうまつらんといひて侍ければ、遣はすとて
露しげきよもぎがなかの虫のねをおぼろげにてや
人のたづねむ。なにどあればかゝるめでたきうたもよむ
又貞操しき事は、世にならひなし。　同日記に源氏の物がたりを
おまへにあるを、とのゝ御覧じて、例のすゞろごとゞもいできたるつゐ

ついでに梅の下にたてられたるのみにかかせたまへる

すきものと名にしたてればみる人の折らですぐるはあらじ

とぞおほせらる。さまをされば

人にまだをられぬものをたれかこのすきものぞとはくちならしけむ。めざましうとぞきこゆ。以上此式部の口清(クチキヨ)き廣

言まで、いかばかりか他人にけがされたる事なしとせむ。これほどの女房すら、少(スコ)しづつの誤(アヤマチ)あらぬハ一人(ヒトリ)としてありぬべきならぬを、此人一(ヒト)たび宣孝に嫁(トツギ)たる外、前後ともいささかの名の立ちたる事なきハ實に正しきみさをなり。拾集、家集などに恋の歌ありしハこれや或ハ題詠ある時のすさびにて、其根ざしをよく尋ぬれば、わつかのあやまりもあるまじきさまなり。爰にとのにあるハ御堂関白道長公の御事にて、これより深く心をかけ給ひしかバ、其時の贈答など、ふとうちみて、おもひまゐらする人のあれ、前の日記に引けるさて云、わたどのに寝たる夜、戸を叩(タヽ)く人ありときけど、おそろしさにおともせであかしたるつとめて

よもすがらくひなよりけになくなくぞまきのいたどをたゝき
わびける

かへし

たゞならじとばかりたゝくくひなゆゑあけてはいかに
くやしからまし。是ハ御堂殿の夜中にたゝかれけれど戸をひらかざりければ、はじめて此歌をよみて送れる也。此殿ハ其身摂政関白従一位氏長者にて、官録身に極(キハ)め、御子あまたおはせる皆高官也。女子ハ一条院皇后、後一条院皇后、後朱雀院皇后など皆

此殿は御子なれば前後をもあまたなき榮まで天子まれおさ
るいきほひなれば世中は夏我心はまなぶ只式部の
きぬぎぬ奉らぬばかりなりかしがいよ〳〵御心ばせも増りて
きぬ〳〵いとゝ弱くもなる年久しき程なるをみるゝにまさる弱
はぬやうほぐ〳〵あるゝ申るゝ一ツとして人は及ばざるハ思ふ
今京はぐめより今は世に至るまで世にあり〳〵き人おるべ〳〵

○年内侍

おく〳〵露をも袖はしぬれて秋ハきぬ
此歌ハ続後拾集秋上に九月十三夜十首歌合に初秋露とあり露
ハ草葉は上のゝおくゝをのと思ひに入は袖にて泣にぬるゝ

秋ハ来にけりとの心をよめるゝ所なり
年内侍ハ作者部類に後深草院女房藤原信實女とあり此信實朝臣
ハ歌は口調一風俗のよりてゝ〳〵なり新勅撰以来ハ此朝臣なぐと最
一とすべきなり女子も四人あるなるに三人まで此集にいでゝ
ゆる後嵯峨院少將内侍藻壁門院少將此年内侍也いぢしも親に
劣らぬ上手にて其ゆゑ拾集にいと多し一人なゝず三人まで
うばゝるゝ名を得し女歌よみ是も前後あるゝ皆其処に
えゝ〳〵にて此内侍ハ後深草院のいとをゝしくおはす頃より御
位さゝせ給ひし後までも御傷奉らず添奉しうはおん
うつゝゝまれ深くおはしまし又奉公心ざしも人よりハ殊ありけり

をあらのをいはば。增鏡うちのゝ雪はゝ云。後深草院いまはのときうまさ月ゝ日。さくらゞ
ゝ多くまゐり。朝餉にて。人〻こゝろ〻しらぬ心
する。三条大納言公親は奉る根ゝ。露おきそふる蓬の中に
深と云文字を結びこめる。糸はさまを色なるべきいとをんなりて
ゆるぶ。うへも御目とゞめて。なるまゝにいへ〻とはさまを
人〻およすべてうまる

年内侍

あやめぐさ長〻ねをかけをかをかさるろ
いづくぐん　同おりゐる中は君ゝ。宮中やうゝほのぎ
ゆふことあれば後深草院は御心まゝにて。御位をおりゝ給ふなり　みつぐあるべし。心

ぼそう覚されて。よろしけまゝ思ひまづのおる御物ゆづりみつい
でゝ。内侍所は御幷のうゞ。めぐへられるゝ。五千七十四日なり
けるをうるまゐりて

年内侍

五代ゝいへゞいたゝのうるはてセナゝあるはゝのずを訪や
ゝ。うゝて十一月廿六日おりゝやのゝ十三年はおん
ゝぐりゝ引まゐる。おいはあるしなり。ものびぐきなり
ゝ。ものなりとゝまる

年内侍

いまはゝておりゐるやはゝ志ぐらしれけるちぐうきゝて
ゝる以上是ゝ申奉云さまゝらしゝ。此人弘ハ。宮ゝゆるゝしゝる人ゝ
よゝ也移ゝ。支同書ゝゝゝゝゝ。此末ゝ出さる中納言　て。ゝゝ。ある時ハ。此人ゝゝ
典侍ゝ。ゝのゝおけあれてねとゝみゝゝ。も此人也　さて此内侍。父

信實朝臣二人は兄弟なれども後れ〳〵のちは世に埋もれ引こもり
てやあるらむ　新拾遺雜上に老けぬちあつさをいふ山里に老
ぬるまゝに埋もるる亀山院より題をさぐりてよりてなる

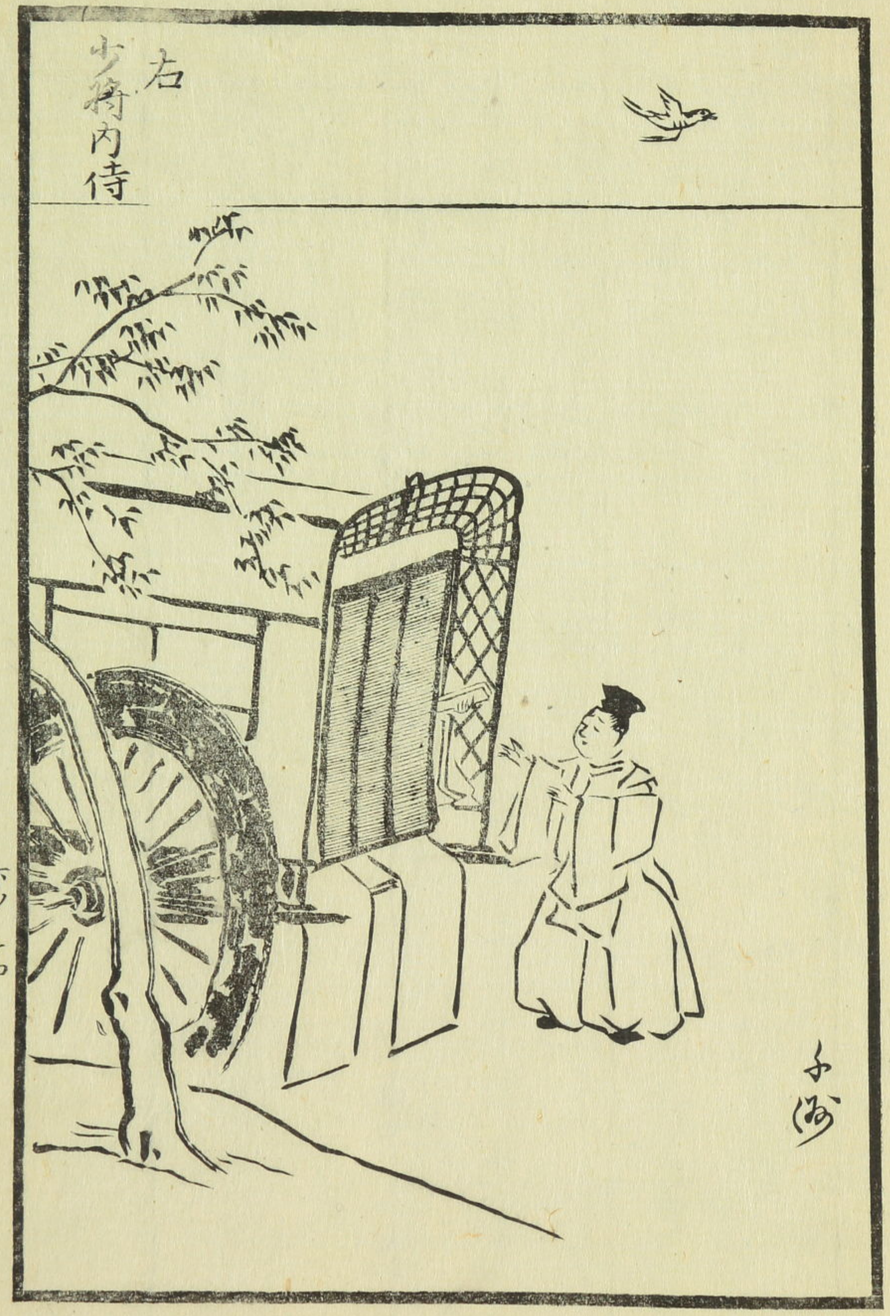
七夕衣

秋きてれ衣おゝ紐ぬれば七夕はしばらくしばらくのほ
ゆ〳〵此のちあるべきかぎりせるにて節もはせるるる
とかるる以上是其の名高のわ〳〵と思食いでさせるるにて題
をさぐりたまはせらるゝとてのうまければ歌はたゞ
手度〳〵そはせるやゝ心ほそきをもかぐらめ物そぶらま
はるるよりなり。なほ世人のそはさよりはるかに
おくれたるもいでゝ〳〵あるべし

或書云。弁内侍は後堀川院後嵯峨院に仕へ〳〵宦女也。此女房、才智人
に勝れ和歌に誉又世に聞えり。或時殿上賢聖に障子の繪をみて唐
土まで人珍ら〳〵かりぬべけれど。吾朝にはいとあまたゆ
是を図するまゝにざるなるべし〳〵といひければ帝さて〳〵感
ひて。則ちそれをまはるやゝいへども辞して云。坂本の仰
木村に住けるを也以上と見ゆ。其見職に高き事。是又男方といひぬ
今京此来ひるゝ〳〵おとゝてこの一言よりあるべくふとぶべ
き人品也

○小式部内侍

ちはやぶるかみなりさまるそはなぎ〳〵のいとてもふべきみにあらぬ


右
少將内侍

左
小式部内侍

此歌後拾遺集雑に出。はし書ハ下に引る雑談抄にゆづりて省く 歌の意ハ。ゆづりし孫子を聞(キヽ)
侍しよりわれも死(シヌ)ばかりかなしく侍なるの表向(オモテムキ)にとゞまりひけり
行(ユク)べき身にはあらねばぜひなしと。行(イク)に生(イツ)をかねて死ばかりにのる
合せける即席(ソクザ)の名歌也。此ことハ諸書に多く出(イデ)けるなりけり。雑談抄
云。小式部上東門院に仕へし頃。大二条殿(関白教通)にふかく思はれしが
せしが其頃御所労(ゴシヨロウ)にて久しくありて平愈(ヘイユ)し給ひけり。上東門院へま
ゐり給ふに。式部大盤所(タイバンシヨ)に祇候(シコウ)し。大二条殿立いで給ふとて。死(シナ)ん
とせしは。など問ハざりしと仰られて過(スギ)給ふを引とゞめて。しぬべ
かりき。かく申けるを感情(カンシヤウ)にたへず。かきいだきて局(ツボネ)に
おはしけるとなり。此(カク)かくれ如き事。あげてかぞふべからず 以上

とある如くいと多かれバ其かるはしを採(ツミ)て下に云べし
小式部ハ橘道貞が女(ムスメ)。母ハ和泉式部也。小式部とよぶハ。母の呼名に次ける称(ナ)なるべ
し。是も上東門院に仕へまつりかよひ給ひし人もこれかれ見える
栄花物語にしげゝゝ頭中将公成の子うまれてまかりけるよしあ
れバ後ハ公成の妻となりし也。 金葉集雑上に。和泉式部保(ヤス)
昌にぐして。丹後国に侍ける頃。都に歌合ありけるに。小式部歌よみ
にとられて侍けるを。中納言定頼。局(ツボネ)のかたにまうで来(キ)て。歌ハ
いかゞせさせ給ふ。丹後へハ人はつかハしけんや。使(ツカヒ)ハまうでこずや。いかに心
もとなくおぼすらんなど。たハぶれて立けるを。引(ヒキ)とゞめてよめる
大江山いく乃ゝみちハとほければまだふみもみず あまの

はしだて　上以　今云定頼卿は心ありて、小式部いはふをされたれば大方母
ときぶにたよりてありしけんを、此度丹後へくだる
ることなれば、いかにぞはいかにのん、丹後の母のもとへたよりに
ふみのたよりやは手使はいかゞと心を含めて云る
故、あふづれる口をしく思ひて取あへず読て、いで
あつしたまへと、袖をひかへてよみかけし也。著聞集に此事を
云、大江山云々とよみ、かゝる思ひあらずと云ばかりのかたどらへど
返しにも及ばず、袖を引放ちて逃られにけり、小式部是より歌よみの覚え世に
いできにけるとありけるに、珍らしき希代の勝事也。これなんどは
速なりけるにてば、いかなるやうなる此人生得しよみなりて、

五才ばかりの時、乳母に抱かれていかんのかしの足をて衣をふまる
きられば、めのと是をとがめしに小式部
いはのまにかのとげられ、のえひきて、とてもめのとおぞく
ろきてころをとふに

　ふるさとへおもふの心のよする、とてぞいひける。又

十訓抄云、和泉式部の女小式部内侍此世ならずわづらひけり、かぎ
りになりて、人のかほもみえぬ程になりてふしたりければ、和泉
式部かたはらにそひゐて、額をおさへて泣けるに、目をはつかに
みあげて、母のかほをつくづくと見て、いきの下にて
いかにせんいくべきかたもおもほえず親にさきだつ道

[illegible]をしらねばとうれさしてる解(ニヒ)まていひらかねば天井(テンジヤウ)の上に。
あらびさしてやあり玉と見ゆる輝あかてあれあるれは
ひとりさて分けあるこうもさめてよろしくなるまう。
又五続ぬぐうまるおとく大二条殿左門督なと申ほどのや
白川は花見はかりの物とて小式ア内侍はかくと仰られれば
はるれとぬかるるなるとたるうのもるうはのるや
[illegible]
かく申るしばしばうずなるはかりかるるる
○少将内侍
うみをなるてもいつかるか師みられ月はさなるでは

此歌八續古今恋五建長五年九月十三夜十首歌合ニ寄月恨恋有。
一首は心八恨(ウラミ)ても。なきても今八こひあひる。こひあひる時。
よみの月ハ[illegible]
ハひる。知なるべし月ハ[illegible]なるよの心なり。
忠峯の。あの[illegible]
此内侍八信實朝臣女にて。年内侍。門院少将の兄弟なるべし。年内侍
の所ニ云ハ。大系図ニ。吾ア少将在氏妻とあるは此人なるべし。故(コヒ)
少将内侍ニ云。是も後深草院ニ仕へ。増鏡ニ。大嘗會ハ。信
實朝臣といひ引よみ女の。少将の内侍。大内の女二所(ふたり)
ふ。をいらぬ日ごろ降て。いとのめり。縁(ワモ)らる暁(アカツキ)おほ

きおぐ(実氏)のうまひろ

九月九日大内山やいろなんこのぎのもんこんつぎ法

ものこれ　ほうの

少将内侍

九重はちりはてぬとあきはてぬるこのちりはて

たをみるにつけてこの初めは弘ハ続古今ニいる。後ハ新拾遺ニ

いる。おかきぬぐなぐやゆる人はいつれもこれ引なぐ

送れるニ。此内侍の母は宮内卿

玉葉集雜五。四月八日松尾祭は使ニもてゆくニ。内侍ハ

ぞ。上卿は尋(タヅネ)ゆくニ。おりしも時鳥はなきこれば

ほとぎすきこのあるこりにはなくあとをきくにはなこ

なのりせしかや。とあり。是此内侍はなぜのくこころまてのみこのばそ

人をきこる。(コト)誰ぞと問(トヒ)ゆくに。時ニあひてほとぎす寸

はなきくこと。とりあへぬ。ようてこそ。いのちのり優(ユウ)な

ほうん。そこをみこのぐと。　さて此人二人兄弟(ハラカラ)父信實(ノブサネ)朝

臣ニ先(サキ)ぶらてみまのりこ。甚こと。新後拾遺集ニ少将内侍

みまのりて後年内侍さまのつてゆくよりやてゆくこ

やて。光俊(ミウトシ)此人。新三十六人集ニ出　朝臣は。信實朝臣ニ送ル贈答あり。又同書

ニ。少将内侍みまのりこ。対さまのつてはちいくほどなくて。

信實朝臣ニおくれて。よろみ侍。　年内侍

それこそはかきひとこ分はすてはまつのこれ

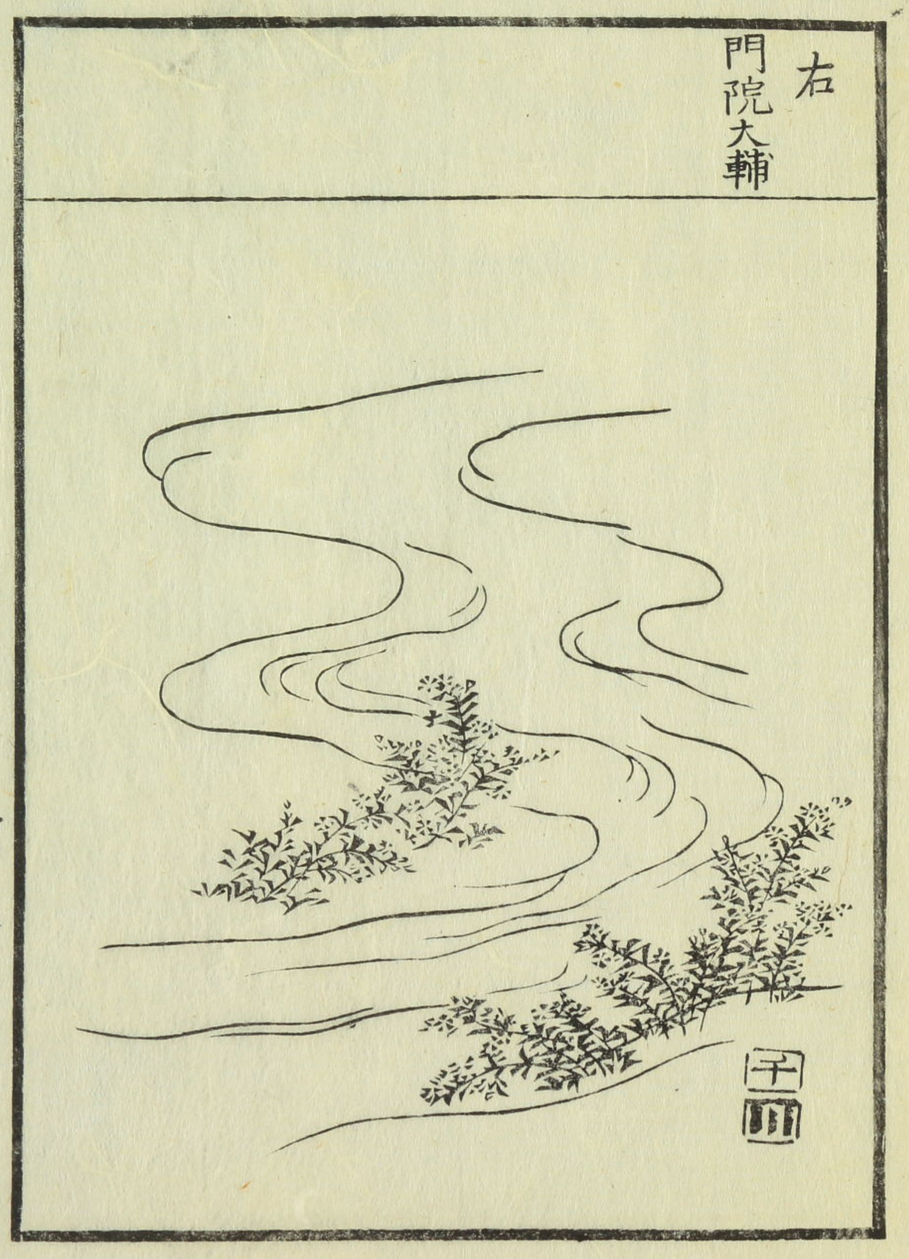
女とそもてのまゝ・とゝ[illegible]ら・此人・おゞ行まはるゝなゞきと
いゝ[illegible]ゝきゝゝそなり・そよゝ[illegible]・続後拾集ゞはゞめ
て・其後十二度勅撰・一度ゝゝ[illegible]ゝ名ゝも又多ゝ

○伊勢大輔

[illegible]ゝはゞのゝはめゞりきて・みゝ[illegible]ぬ人ゞ立ゝ[illegible]
此ゝハ後拾遺集ゝ成頃ゝおゝ[illegible]て・みゝゝはてのわゞゝ[illegible]
とゝれバ・一周忌ゝよゝる也・ゝの[illegible]ゝ去年ゝ今日・夫ゝ[illegible]
過ゝ月日ハ・又めゞり来なゞら・吾男ハ[illegible]ゝ[illegible]て・二
度帰ゝぬゝと・なゞゝ[illegible]ゝるなり
伊勢大輔ハ・大中臣能宣朝臣の孫ゝて・祭主輔親女也・伊勢前守高橋

成頃の妻・上東門院ゝ仕へて・此頃最一と呼ゝ・ゝ人也・上東門院・彖合
せゝ[illegible]ゝ時ゝ・尤の頭つゝ[illegible]て・ゝ時
めゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
なゝれバとゝ[illegible]人也　此ゝ後拾遺ゝ入る
八雲御抄ゝ・上東門院女房ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ・多ゝ[illegible]女ゞ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
尤ありゞゝ[illegible]　又帝草子ゝ・伊勢大輔ハ・上東門院の中
宮ゝ申時・初ゝ[illegible]ゝ・輔親ゞ女ゝ・ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

左
伊勢大輔


右
門院大輔

思召れ間は八重櫻を、或人をてまはすると御堂(父)門院にまゐらせ給まゐらせ時、件の花の枝を、大輔の許へ遣はして御硯の上は、檀紙をおき、同じくはすのうすいるに、人々めをとをいで申を、みあへるに、そばのうへにて、硯引寄て、墨をとりて、もづるまゝに、歌を書て、まゐる御堂にてこらんずるに、さよげにうつくしきいまゝにはなるれ都はやへざくらの九重は匂ひもとをれ、とのをはしめまゐる、万人感歎宮中皷動云々上皷動とは此歌をうんじ美補る辨宮中ゆゝしみたるも此歌詞花集、又百人一首にはいでゝ

さて此二段をはめて、十訓抄は、上東門院のいせの大輔の墨するほどに、九重をいつゝ歌をあんじ得、一間をゝもいづるあひだは

とゝえまゐらせ、ねられいろ〳〵の木の枝句をはなるゝ心はもやさ、えなるべきなり。さて此奉りる櫻の由来は、砂石集云、奈良都は八重櫻とゆゆしく、當時も東圓堂は前に有、當昔時の后上東門院興福寺別當に仰て、彼さくらをめられバ、ほりて車に入て、おみ〳〵せ給を、大衆の中に是をみあらて、是は子細を、えば、もつゝぐと答へ給ハバ、名を得る櫻を無左右奉ら、べき、別當にすゝめ、なり。

傍車也、つゝ八色もなり、后は仰なれバ、是程は名木をいとゞの進すゝ止よりて、やゝて貝吹大衆ゝやゝ〳〵て打とめ、別當をもゝ〳〵とゝ〳〵まけ、此度ようていのなる重犯はおこおはれなば、我身張本に出べ〳〵とゝなる、此事女院上東門院聞

食て。なほら法師ハ心なきそのと思ひ〜れバ。ようなき大衆
也。まことに色ふかくて。さくらばな此櫻をぞ。わ〜の桜となづけん
とて。伊賀国ゝ余野と云庄をおせて花垣の庄と名付て。垣をせられ
花は盛七日。宿直をして。是を守せらる。今ゝこれ庄寺領〜〜り。以上
是ゝ合するゝ此桜を折て奉り〜時はとかなるべ〜 以後ゝ〜集ゝ云り

○殿富門院大輔

さくらさばやおもふ心をさて乃ゝハえぞやまゝろはれあでは志づくみ
此ゝ〜ハ新古今ゝ二ゝ。ゝの歌あるいよ〜ゝ行くまゝあり。言いでん
とする心乃心なり。歌は心ハ。今ハ思ふ心をそらさばやいつあでは
ゆくとて。やまどといふゝ。山城をいひ〜て。其国は名所なる

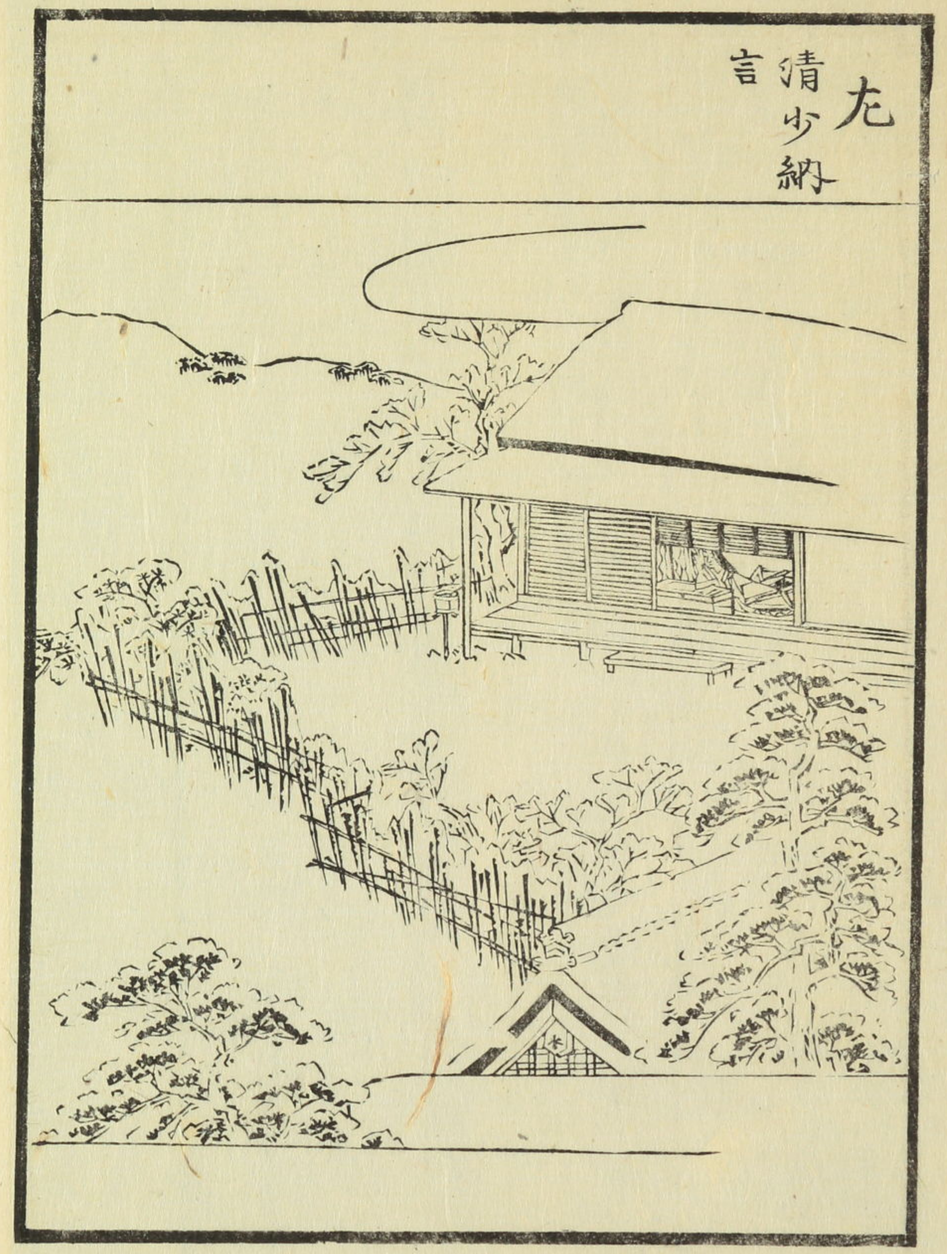
井手はたゞ〜みゝ。掾語なて。とゞめなり。堰とは堤を築て。其巌ぬ
ゝ〜ゝ柵ゝて。水を貯おくをいふ。是ハむの〜井手
九大臣殿はつのれゝ〜堤をいふ

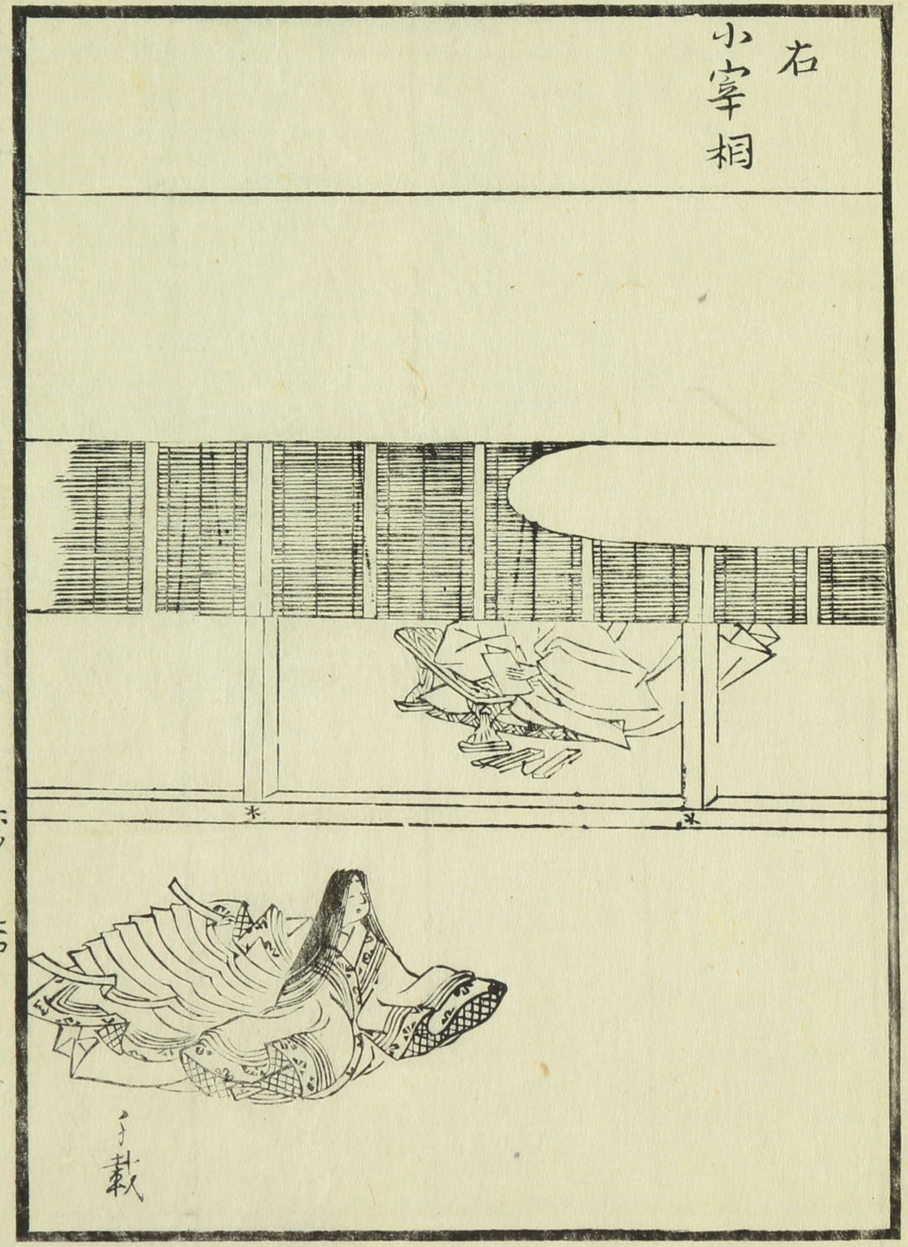
殿富門院と申ハ。後白川院。皇女。亮安徳。後鳥羽。二代准母。順徳院。養母ゝ
おなじく。大輔ハ。高藤ゝ後葉。後白河院は判宣代行憲孫ゝ。従五位上
信成女也。長明毎名物ゝ。近く女房よくゝ上手ゝ。ゝハ。大輔小侍従と
てゝ〜ゝ〜ゝ。大輔ハ今ゝ少〜〜物など知て。根づよく
ゝ方ハ勝ゝ〜。云云とあれバ。其頃上手と呼れ〜中ゝ。学文ゝ
ど有〜由也。此人千首大輔と異名せられ〜程なのれバいとよど
ゝなゝ〜ゝと。愚問賢註云。殿富門院大輔をぞ。歌多くよみゝ

まゝて千首大補と申り今は世まゝれの千首よりはね人作ん
とあるは頓阿法師は誤まて此はぐそ前後は勝て歌の真盛な
る頃なれば百首詠五十首詠なぐそ常は事まて千二千
よりぬ者は一人ゝてあゝぬ中は大ゝて千首大補と呼ハ
口速して時は間は貞多く詠出るを美稱て云る也いつゝの生
涯は歌千首ばかりなんやそ撰集は也是は歌あまよりあ
なりは或は百首歌乃中はなぐこれかれゝえらり是ば千載
集は四首入るゝのはぐめまて新古今は九首新勅撰は十五首それ
より以後〳〵新続古今は至るまで十五度は撰集は一度也
となるまてゝ歌貞多き事を知べきなり

○清少納言

たよりあるふねそわふるとよりたれてよりて久しきあまはは舟
此歌玉葉集恋一は人はそたはのすくるを有彼の心は君の方
よりおとづれもあんと海人は小舟は使ある風を待ごとく
は乗ちとゝ心まて待は松島をいとおゝて下まで縁語まて
志ゝてゝゝは松島は陸奥は名所也はふねは小舟也和名抄舟手夫
称小舟也釈名曰遊艇波之布
一二人所乗也　夫木集廿三ゝは
るのれすまはゝはのまあはふねつりふねとある本は
少納言は清原深養父曾孫下野守顕忠孫元補女一条院皇后定子に
仕ゝり清原氏女なれば清少納言と云此人兼なるゝ戈女まて唐土は


左
清少納
言


右
小宰相

日本(ヤマト)は佛(ほとけ)道さへこそ〳〵うべ。歌ハ深養父(フカヤブ)元輔(モトスケ)が名挙(イヨ)をけがして。
殊(コト)に大切に思(おもは)れぬる。其夜枕草子(此人の作)をもてあつべ。但し仮の言をそへさり
枕草子云(上畧)その〳〵をりなどの人の歌よく作らふ。やがてそのよめなど
仰られば。そこ〳〵とうつよハ。さいつらふおどきいちなん〳〵作るいの
でのまてのこゝやすくハよみうへき。そのれ。ずをもしらぬ時節
をもしらさるへ人のやうに。春ハ冬の歌をよみ。秋ハ春の哥をよみ。
梅ハ菊などをよむこゝろは。よまばよみそ作んされど
歌よむといふ作〳〵ハ。ゆ〳〵人よまれて。そ折れ歌ハ
こそあらぬ。さハいへどそれのみあれバなどいそれこんとそ。歌
作るこゝろ〳〵作らめ。つゆとうこさる方なくてさすに

歌のおもしろくこれはこゝろをえたるまたよくもあらぬことをさい
そよよみいでゝ作んなむなさ人のこゝろあいとなく作なりとま
めやのなけいすれバこゝろはせこゝまひて。さらばこゝで心まゝの事。
歌ハ此のちハよあるもいそでとはこゝまはすれバいとゝいやすくな
まゝ作りぬ今ハ歌の手品ひうゝ作らでなぐいひてあるよ。庚申(カウシン)
せさせ移りて。内大臣(皇后御兄伊周公)いらでうゝいまうけせさせ〳〵まう。
夜うちふくるほどに。題(ダイ)いだして女ぞうよ歌よませ〳〵まへば。
うれうれ歌よ作〳〵きぶそよくもあらぬとゆゝ〳〵いぶすま。
うれハ宮はまへはちかくさふらひて。箱けいしなと歌ハよまで
こやそまをけいしをおとゝとうんでて。なぐの歌ハよまでそ

社みるる題とれとのくまふをさるるとせもとけいせーうば宮

らのくちよめとはいそどと仰ぐやくくまはりて今八弘ふむ

ゆどくなり行れば思ひくのけ行らぐと申ふおとくのくまふやう

くやうなるくとするあゆくのおくとまさるくやまあるな

どのまくのほん弘のむくとはゆるくせるくまんいとあるま

どきくすなりよくうくとは八ちるぞくよひいよめなどせめくも

くまへぐけぐやうきくもいれでさるふまくと人どもよくいぐ

てよあなどゑめちるる紙まいさくのなるほふくをうくて

宮れおまへよりくまはせるくりあるてくれぐ

元輔ぐけちくくはれ考くあやこくひれちくまおくれ

てまくるくとあくをくるまよをてのこくとぐらぐひむきもいみくく

るくばなるふぐくぐくぐとおくぐもれくゆふ

主人れのちくいくれぬみなるせばこくひれ弘八まぐぐよ

まくくけくむくとちくくはずハちくるあみくもくれまるぐめぐ

いでまくでこゆくとけいくくいくゑ宮れ弘八元輔のもくにくて

元といくれなぐくちなぐ後れてちるぐとの意少納言れ返歌は

名高き元輔ぐ後といはれぬオなくば先まよまんまれ心也まくれま

けくむくとけるくはずはちくくなくもくくとはよくくぬ弘とる

恥とおもはぬ紙なくば千弘ぐくぬハくれ一人まてもよむべくと

自稱くる也實ま少納言ぐいふぐくくぐ入り立れちぐまあと先も思ハね

バ、うづみなど多くよむもあれど、猶の心を毛年へ入るもあれども
むほどの者ハ、大事とおもひて、ぐりまはしみがくべし、此
心もちひハあらざるなり、古今著聞集云、順徳院の御時、十月
の頃、蒔繪しる硯の蓋に、菊を下繪ふしる、檀紙をしきて、き
くれ葉を一枝いれて、よみてまゐらせとありける時、定家卿
はしりがきにて遣られまけの上とあるが如く、あしくよろんに
ハいろはやうにもよむべけれど、名をとるさまの口とゝきなり、
されば少なるべんぐ、弘法仰られがさまふまぐきちすま
るもるハ、とゝわるて、弘法深く心を用て、道にはまき故也、な
事ハ上ゐ色いとゝぬ隈なく、世に稀なる人にハあれど、枕草子

一部十二巻、大方これハ、ぐるもあるべきうはさにやあ
平生ハ心用ひるもの、ゆりもむ、人にハ悪まれしらと見て、紫式アの
日記云、清少納言とて、もとりぐのなにうる侍る人、さばかりさ
かしらち真名、うきちらして侍るほどよくみれハ、まぐいとゝん
ぬるほど多のりく人にまとなんと思ひ好める人ハ、うるべきお
かりし、行まるとてハ、ゆれバ、ちんになりぬる人ハ、ゆるすべうすべろ
なるをとりも、物のあるれに進みをかしきまりも見すぐさわるべ
おのづからもまぐく、あるなるさまるもなりゆづ、そあるり
ハなるわめる人のもて、いのでうそよく侍んと云上と式部ぬ、ハ
人ハあるべ悪みさるもてもこれるあるる心もちひハ人、今毛

れ、れあり。共ハうきてはしるむへきつもなるこの書よく
よみ。ねよく、このおてられハ新なるんよりは一トそこまきらで
所ちはる人こそひとはるこのよまちつれ。されバ式アのひと
ぶく行末やまろ〳〵のうくもむ。老て後四国ほとりて落ぶれ
うつもも又みちのくまを下りてはてるりもつう。但し松島日記など
偽書なり
元輔集ハ。もすけ。むすめ。きくあり
うつれバいでさまたるをふのみちはうとぶられハ
あはれ〳〵　同書ハひるる人
いつぼのおもふもむ〳〵の打まもむ老てうるうとほる
われを　是らも少納言ぶうるはあぶるのそとするそ

八十三までなるぶ〳〵人ありとしんバ少納言ぶ老ハいるるでも存
生しなるぶ〳〵　赤染家集ハ元輔ぶむこのすうるる家ぬのハ
はるハ清少納言すう〳〵ぶ。言いうぶく凄て。へぶての垢もなく
て。ふれてみるされ〳〵ハ
あもれく言つるさとのあれるをいぶれ山もの山ぬ加
きねるのみ涙　続千載集雑中ハ老てのちこそうつて
ぬるを人のうぶねてまるで来りれバ
ふ人もありとそ〳〵いとねられやうそれとおぶ
ろれ法。ふ〳〵そう。うれバ二度ふ〳〵ぶうけぶりて。
いをうすのるるさまをすうれなるぶ〳〵。打此人ぬ文能

勝れたりといへば、後六々撰の方に入り

○土御門院小宰相

これなきのみならで猶おなじくぞあらん物とて
此歌は続後撰集恋五に絶恋(タエコヒ)の心をよみ侍り。歌の心は、そのかみ
かよひし恋をしらんには、せひなく別るゝ事もあらめ、さもなく
は時はまたそれくれども、かく契(チキリ)ける中なるを、かく同じ世中に諸共(モロトモ)に
存生(ナカラヘ)てありながら、今それぐになりて住(スマ)んとは、吾(ワレ)ながら
知(シラ)ずて、此二月過来(スギコ)しよとなり

土御門院と申奉るは、後鳥羽院第一皇子、御諱為仁(タヽヒト)、御母は承明門院在子
内大臣正二位源通親公養女、實は法印能圓女也、人皇八十三代帝に

まします。小宰相は従二位家隆卿女にて、此院に仕へし女房なるを、帝(ミカド)此
しのびくにめしまつはし由也。 増鏡にあそれ院（土御門院也、此御事は新六々集に入り）加
うれさせたまひぬと云々。家隆の二位、女小宰相とゆえしは、おのづから
けぢかくさぶらんどなれたる人にや、人よりことにおもひしづ
みて、御ふくなども、くろくそめたる

うしやうみしあまりそのれはふぢ衣やがてのてきるべきこの
よでありけれ 以上 此人知恵(サトリ)も深き由は、鳴門(ナルト)中将物語 後さが院の。白川少将
の妻に御心をうつさせ給ひて、荘人してさぶらはするみそかに未
[illegible]
おぼろげに。上 墨御ふみをひろげてこれそれよりかはれとある下り
ところ

に。色とりに、そでをとらでひとつ墨(スミ)なるまゝのさて、そとのやうに

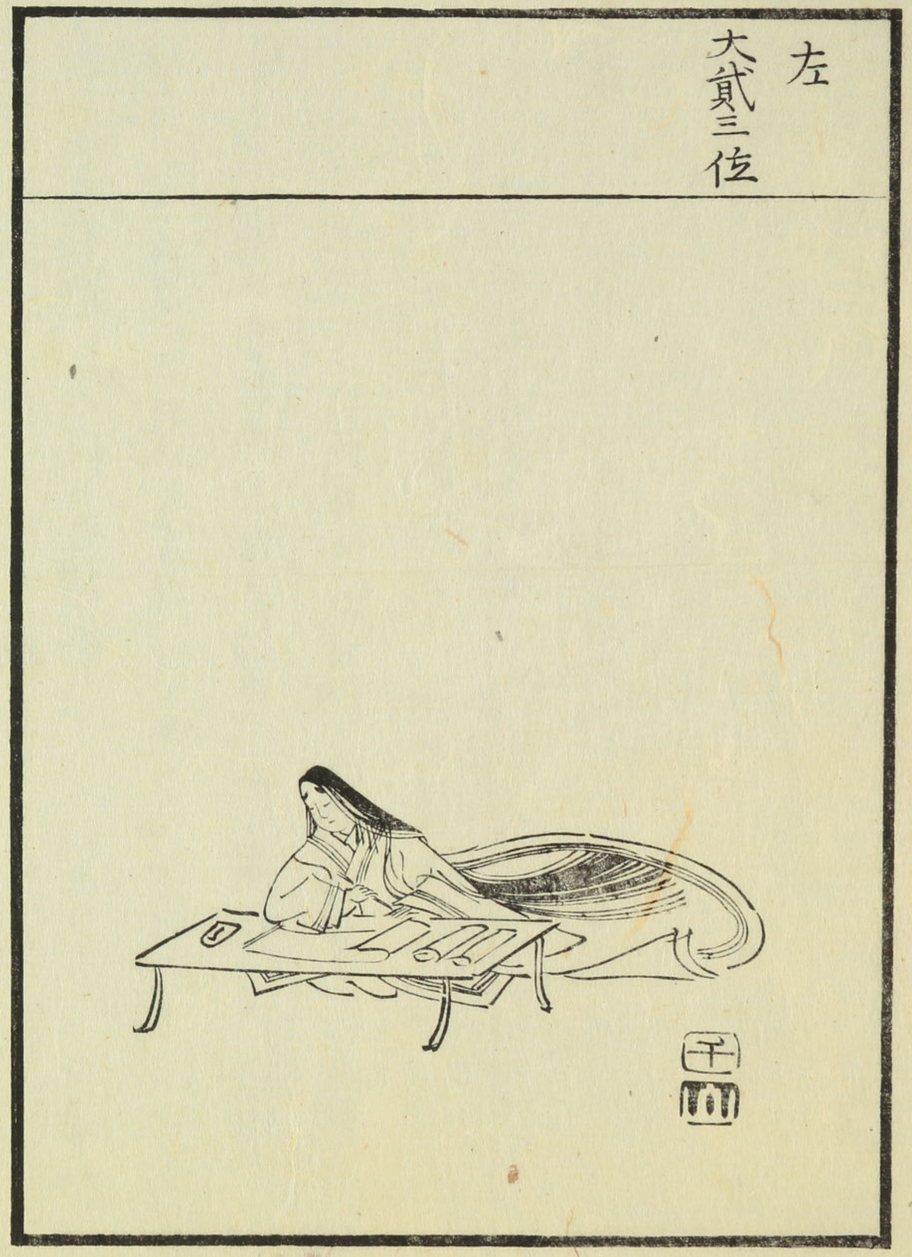
して御使よこしあはせうゑ御ふゑ手のやうにてこゞはね
をこらんとて空しく帰るよりほいなく思食よこのを
えどありうゑく御思案ありけれどおぼしうるこなうう
ゑれば女ぞうちを少くめてこれをえを御書ありけ
るよ業明門院ふぶいもやうれ房とて家隆卿の女ぜうちひ
けるぞむう大二条どの小式ア内侍ぜ少人月といふ文字
をこうきてぜうはされうればさる好えのいづこ式アの女
なれば安く心得て月の下ばをといふもドばくのりを書てま
ゐらせうゑるえ心なうづ月やうゑどハよたちの給べ出
うと心得ゑう又人のめんなんうえハ男ハよを申女ハをを申なり

されば小式部内侍其夜上東門院ゑさうひうるどのおあうれ
ばいよ〳〵心まちゆ〳〵思召うる是も一定おあり給なんと申け
ゑば御うゑちようゑよ思食てさてまうせうあひうり夜もや
うゑ深更ぬれどよるのおうゑへも入うせ給ゑずとのゐ申ぜ閨
ゆうハ丑よなうぬゑやとみうゑうをうるあるまるよ義人ゑびや
うよ此女ぞうおあり者る由奏〳〵ればうれくおぼしめされ
てやどめされよりうと云へり家隆卿女なれハさもあうべ〳〵

○大貳三位

うゑゞひ〳〵いのちばうゑうあなのうち奏〳〵申れうえぬべきのれ
此歌八千載集恋五よかゝうひうる人ぜ久〳〵く音づれざりうれば

右
高倉


左
大貳三位

つのはゝるゝあり。心はいさゝかも逢でゝるやうに臭もあらば。
よも吾命はあるはゞとゝゝゞゝ。そいのちはかゝてあめなぐの
ら互よこのはゝるゞと契ゝなるれ弛ぬべき事うれと歎さる也
大貳三位は藤原宣孝女母紫式部大貳成章妻ら故ま大貳とゝゝ。
後一条天皇ゝ御乳母故三位ま叙せられゝり。又弁内侍ともいふ。
賢子といふは實名なるゞゝ。狭衣物語八巻あるはせり。母紫式
部ゞ源氏物語ま並びて。源氏。狭衣とて。ゝゝゞゝま世ま来てもや
されゝる程なれば文も勝ゝる人なり。さて此人
後拾遺秋下ま中納言定頼ゝれゞゝまなり侍ゝゝ。菊の花ゝゝ
てゝゝのはゝまる

ゝゝのゝんゝゝゝあらめ君なるでゝれまのゝまを
出ゝゞゝれもれ　新千載集秋上ま中納言定頼物へまの
ゝる花ま門のまえをとゝまりて。をぎれ葉を殘ゞて吾ゝれ
ばゝゝゝのはゝける
なにおぼにほず忘をむすぶをゞのはのおもゞなぐ
人のゝゝもなぐあらゝを思ふはゞめ定頼卿れゝゝれ
ゝり。これ後拾遺恋三ま。ゝれゞなるまゝゝれ。おぼつのなく
なぐゝゝゝるまよめる
あうまゝ山ねなのゝゝ系風ふゝばいでそまを人をまれ
やゝする。又前ま。いゞゝるゝゝゞゝ命ばゝゝハゝゝもゝ

定頼卿へ送られなるべし。但後拾遺点置ほりこうはれ右
大臣はもやんつのすくるる
意ちきはうきうあぶるる物なりばおくふてびと君
をみあーやなぐも見えるれバづはしらぐれぞ
て心ふのく塚ちなる弱どもなれバ今より後遊よいざせん
人ちはれ。ちなはんあるてかくはおき事ようでもいとなり
新古今雜中ニ大貳三位さとよみて侍りけるをきゝわして

後冷泉院御製

たれ人ハ心ゆくとも侍りけるものみハおもはざる
なるを

大貳三位

すみのぼれ松ハよはけれども春ごとにめぐびぞ
ぞ意しき八雲御抄ハ古今集中贈答ハ歌二三首ハ此歌を
證てこのすもりはれ本ハなりぬべきハこれらなりと。順徳天皇の
さよひおのぞくまへり

○八條院高倉

ちとせのなぐのまるいのうまかなきハ多ハおぼゆる人のおもひで
此歌新古今意四ハぶいまるぞとあり。されど弱の心ハ大ちちよく
もれぬ。物おもふ時ハ何とはなく空れなぐめちるく物を
ちを意しき人とよひれ如き月ハ夜よがちひ時ハ面影
さへ今ハ如くはおもはれて。せんうなるあの心を出ういとうなり

さる白ひふくの

八條院と申ハ鳥羽院第二皇女（暲子内親王）御母、贈太政大臣長實中納言女（得子）美福門院なまの寸二条院御母代故院号ハあり也（内親王院号ノ始也）

高倉ハ大系図作者部類ハ法印澄憲女とあり高倉宮居所よりて呼へる名也父澄憲ハ少納言通憲子也通憲諸道兼学して諸事昧こうず九流百家に至る無双の宏戈博覧なり出家して少納言信西と云ふ後白川院の叡慮まこうなり大小の事心に任せ給ひしかなり少しも私なくこうまこと信頼の大将を望まを妨ぐる恐より事起信頼尤馬頭源義朝をこうらひて平治の大乱に及び信西此時命を失へり其子男女廿二人の内僧俗十二人国々に配流せられしより一人として博学なるぬハなし高倉の父澄憲ハ下野国に流罪しり此人も大系図ハ四海大唱導一天の名人也とありて皆秀才孫孫なれバ高倉も又世に秀でしより其よりある孫々新古今以来勅撰に負あまた見えしより既に世をはなれ出家して佛の道に心をかけて西行法師など志しかたらひて新古今雜下に西行法師山里よりまのりいで昔出家して後月はにあらでなるなど申しうつりしに

うきよをば月見ぬうぐいめぐりきてうはるあらしを又てらすらむ　　同集に出家して

うき世をそいつるほどをいつのまに月はいる

うきをうらむ　是ら深く世をいとひ一向佛をこのみたる
又新勅撰羇旅よみやこをとをみまきてところ〳〵まうで
めぐりあるくとよろこび侍る
よをうしとなげき都にうつりすまいづこのやまとは
あらもとめん
たづねやへ〳〵つゆをうづめるまくずはなれや
まがきのもとなどあるをとをれがてて屋などよなりて
さすがひとりさびなるはいつのうらやまかよう考へて中古
六〳〵撰新六〳〵撰などよりあらばまこいふべし

○高内侍

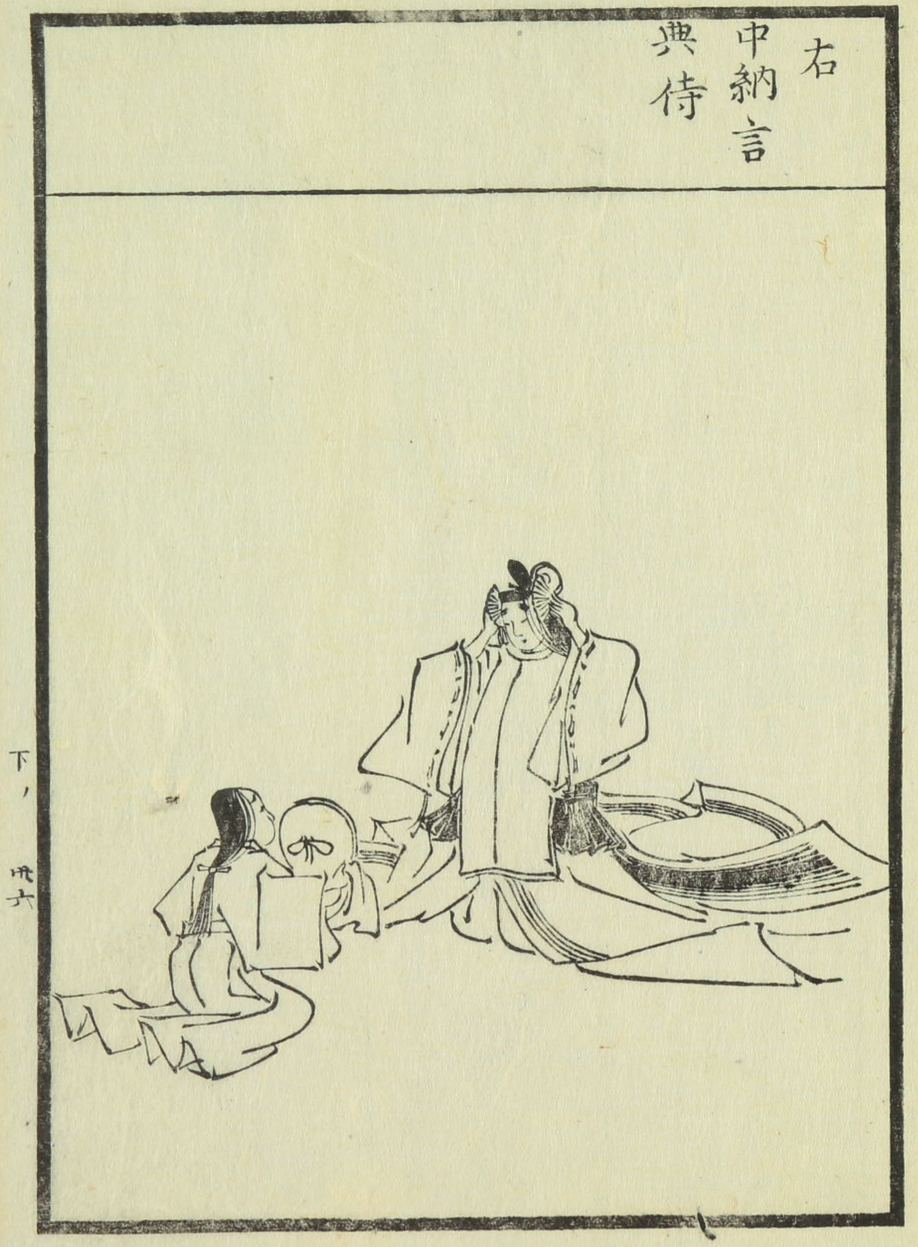
ひとりぬる人やたれとも秋はよを長くとうれの君よしがぶる

此歌八後拾遺集雜二中関白のうちはばめうらに よびて侍る
けうめてうちよりはいりてうがくしてうたをいたして侍るば
ちとあり一首は心ハ摂ぬる人とそ夜は長きハ知物なれば
まのくしうまれハたれども君ハおそふ人と夜毎ふうしゃ
夜の長きうきハ知りもぬそづなるを誰秋のよを長きそのと告
まゐらせ侍る也　新古今恋ま中関白かうちそめ侍りし

ちすがけひ未ようはうるれバけをうるめいは
ちうまのれとよみ侍る此ほどのうなるべ　うるの歌ハ
新古今ハ中まる　すぐれてやさ〳〵やうう

左
高内侍

右
中納言
典侍



高内侍ハ作者部類に前ノ掌侍貴子。高階成忠女とあり。中関白道隆公の北方となりて。御子あまた生。大鏡に中関白の御事を申處。今の北方ハ。高階成忠のぬしの御女なり。のちにハ高二位とぞいひ侍し。その腹に男君みところ女君よところおはしまし。大姫君ハ一条院の十一にて。御元服せさせ給ひしに。十五にてまゐらせ給ひしに。やがてその年の六月一日中宮と申き。（中宮御名定子と申しき。清少納言馬内侍などハ皆此宮の女房也）とありて。高階氏の女故。高内侍といひ。中宮の御母なれバ二位に叙せられたり。又中宮御兄伊周公を儀同三司といひしかば。儀同三司ノ母ともいふ。漢書なども学ばれしなり。同書に。それハまことの文者にて。御前の作文にハ。ふみたてまつられしとよ。少々のおのこにハ勝りてこそきこえ侍しかとあるにて志るべし。又女なれどもしかしも同書に此人の子どもみなへをさへ備ばる處に云。母上ハよろ内侍ぞかし。されど女のあまりさえかしこきハ。もの悪きと人の申なるに。此内侍後にハ。いといみじくおちぶれられしも。そのけとこそおぼえはべりしかとあれバ。関白うせさせ給ひてのちハ。心のまゝなるふるまひもまじりたるよし也。今も女の才子といふものにて。まゝかゝるさまの人ひとそのならひ心すべきことにこそ。其後御子伊周公。花山院の御在所を射奉し事に因て。大宰権帥に左遷せしを歎て失られし也。詞花集雑に。帥内大臣あかしに侍ける比恋かなしひてやまひになりて。よめる

よろこびるみやのうちまでめしてこそとひつるもなるべ
きにこそ。とあるハもっともあるべきなるべし。玉葉集雜三ニ云
しる人なくなりぬるに。都なる母のなくなりぬるきくに。眼きくに。別れ〳〵程の
と思ひいでらるべし。儀同三司。そのきさきもれをふぢ衣やどて
それこそこのぎ　此ふみ事ハ栄花物語にハ別の巻ニ云
のなりけれ

○後嵯峨院中納言典侍

いにしへをしのぶもいとかなしきものなれ
ばこそ人も契りをむすぶらめ

此歌ハ続後拾集恋五ニ大納言典侍にていでらる。一首ハ初
めよりいつはりなんとて深く契りをかはすべきにあらず
りしかばとて。あまのもしほくたるべきみにあらねば
移りやすくこころもとなき。此女中ハ御ひとそこなりし也

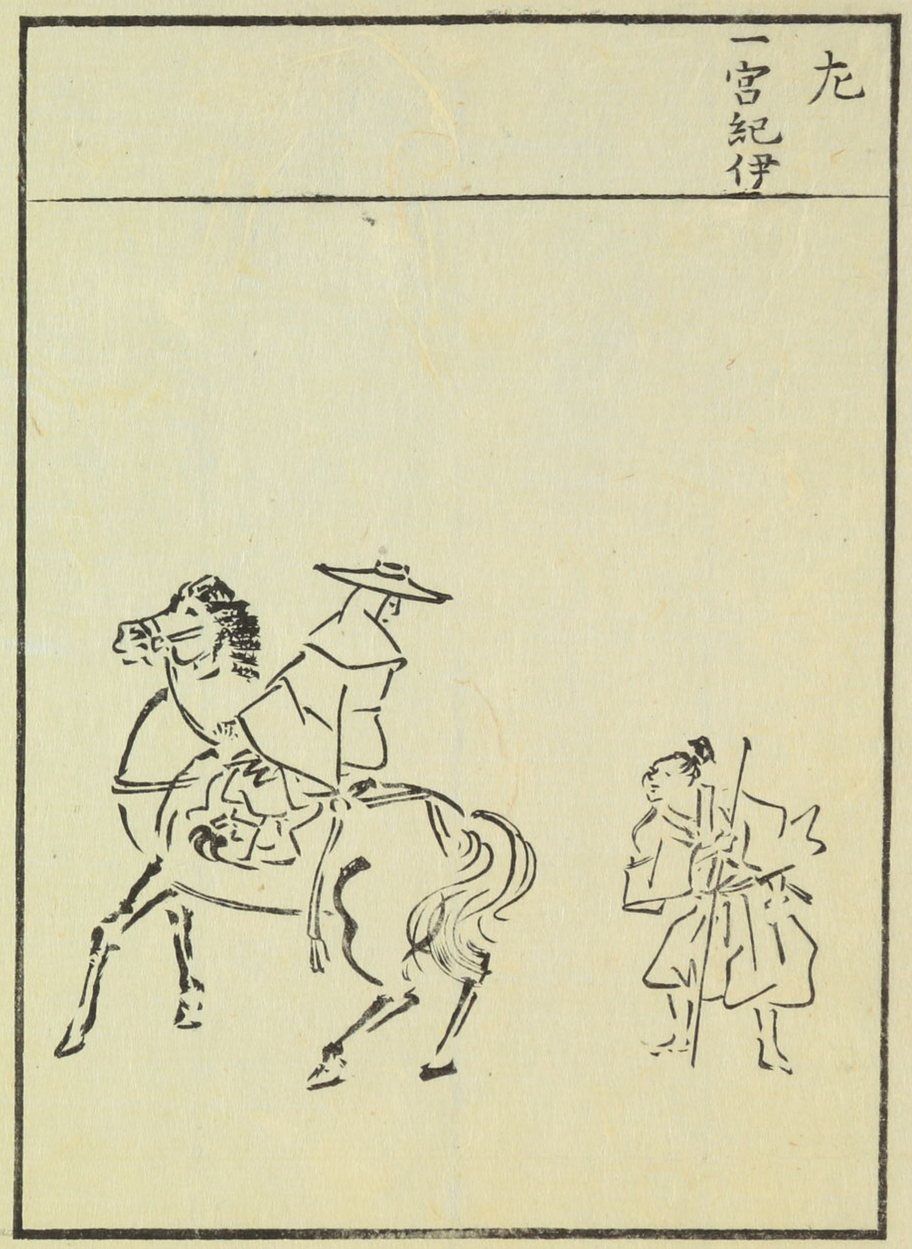
後嵯峨院ニ申奉ラハ。土御門院皇子。御諱邦仁。御母贈大后源通子。贈大政大臣宰相
中将源通宗卿女也。人皇八十七代帝ニまし〳〵ま。御父遠所ニおはしまし
後ハ。ひたすら〳〵此典侍の父。源通方卿ニ方ニおはしましければ。此女ハ既くらう
仕まつりしなれば。典侍ハ作者部類ニも。源通方女とあり。父通方大
納言ニなりぬ。拾集ニも作者部類ニ。すべて大納言典侍とあるを。此三年
六人集ニかぞへて。諸本ともニ中納言典侍とあるを。又増鏡ニ同じを
ちいでらるべ心得ぬ。すべて此人の事ハ多くあるにあらばこそ
増鏡ニいてらる。挙おくべし。増鏡ニ凡〳〵この巻ニ云。後深草院ニ
びの所　帝まうでさせなくおはしまさぬ。はのれ。御あそびの外
いとかなしうし。政ばかりこそ若くそのまへばよりひるさきに

殿にて女房は中よりぢりて、らんご貝おほへ、あまり、へんつきなど
やうはことゞもを、ゆびゝまきはゝ日をくくるまゝばさつくふ人ども
うちとけ悪く心げのひすめ、節會臨時の祭なよくくしの公事
どもを、女房よりはぐせてごらんすれば、大うねとゞ奥ゝ申まゐて、
殊さら小さ筥なとつくくせて、あるる奉りまゐ上もろこび
おぼす。入道大さおゝぶれ御女、大納言三位殿といふを関白よな
さ、按察の典侍さこのひとの女、大納言典侍、前のつぐさよ大納言典侍
れ女なりしまやえとくくれ中納言典侍、此人勾當内侍、弁内侍、少
ば、此人はあらゞ、混ふべうず
將内侍、やうれ人ゝ皆男は宦あて〳〵其役をつゝむいとゝのふ
事ゝてゝびあゝるもゝの〳〵、中納言典侍を、權大納言實雄は

君はなくるゝ、下うづはくゝといふ叶ふゝとて、曹ゝおゝに、
上もいゝゝく笑はせ給ふ、弁内侍、葦はとる書て、かれ房はさゝおゝ、
はのくゝのあゝれもゝねのいゝなればなゝるゝもゝとしてゝぶ
れ、ぶはまる　うゝ
つゝらにはれひゝのもゝ、あのみぶれもびゝゝるもなくにゝ
きてやゝゝれし上いとゝくゝある御遊なれば、ゝよりにけて長ゝ
といぶせり。さて此典侍は大系図は姫宮母とあるはいかなゝゝを
なゝゝん、若後ぶれ院の御女など生奉りゝなどあゝゝ

○一宮紀伊

浦風はいとゝもれもれ濱あるはゝもゝよはなくなゝ



尤
一宮紀伊

右
門院御更

此歌ハ新古今集冬ニ。堀川院ニ百首奉ラルルトキ。浦風ハ吹上ト云ん
序。吹上ハ濱千鳥ハ濱ニ序ナレバ。皆其處の物ニテ風情ナリ。
歌ノ意ハ。浦風ハ浪の高く立ツトミテ。ハヤ千鳥の聲ハ
ちかく聞ゆるよ也。吹上濱ハ紀伊国ノ名所ナリ
一宮ト云ハ。祐子内親王ハ御事ニテ。後朱雀院皇女。准宮三品。或ハ二品御
母。中宮嫄子敦康親王御女也。紀伊ハ色葉集作者部類ニ。散位
平経方女トアリ。紀伊守重経の妻ニテ。故ニ紀伊ト云。俗草子
云。素意ハ紀伊守重経也。号紀伊入道。此一宮紀伊夫也。騎馬ニテ
楠葉ノ御牧ノ政所ノ前ヲ過ニ。下人出来咎ニ云。無止戈御牧ヲ不下
馬テ過ル。何物ゾ。入道云。紀伊入道素意。後拾遺ノ作者ニアラズ
ヤト云云。下人無咎ニテ令過ニ云云。素意ガ事トイフハ。紀伊ノ夫也。其
妻の名ヲ挙ルニ。紀伊ノ名ハ世ニ聞エズ。堀川院
艶書合の時。最一ニ出サレル。歌。金葉集。又百人一首ニ撰ばレタル

おとにきくたかしの浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそ

ニテ。すれとよめるも。此紀伊ハ歌ぞの。コハ中納言俊忠卿俊成の父の
人しれぬおもひありそのたま藻はなびきよるとぞいふ
さもあらばあれとよみてやわ〳〵引返ス也。艶書合ハ
は。愛ニ云ヒナキ変なれば。さなき人のもあり。此時のあり
を引おくべし　琉世繼物語云。堀川のみかどの云云。和歌をもて
ぞ。なぐさめ給ひける。五月の頃ほひ。ながめ給ふ

ふや。弱よりも男女よみのはくせてとらんどゝる。大納言公實。中納言
国経なぞよりもすぐれて。後頼なぞ。一人くも。さぶ〳〵れうすやう
ようきてやりさまれゝり。女ハ。周防内侍。四条宮筑前。一宮紀伊。前齋
院のゆり花。皇后宮肥後。摂津の君なぞ。こゝろ〳〵れ女房。ゝれゝ
わ生てそゝ返〳〵あくり。又女ゝ〳〵みゝる弱のみて。男れ許やりなぞ
〳〵る。堀川院れ艶書合ゝて。末の世までもそぶやり。よゝ弱多く拾
集なぞよいれるなるべし。二間まてこうゝて。朝食ゝる。又時れ弱よ
み十四人ゝ。百首れ弱。これゝゝうなゝれぞ名高き百首故筆れ便まゝ〳〵う おの〳〵ゝ奉ゝ拾
ゝり。男女僧なぞ弱人。ゝれ名あ〳〵はれ〳〵る人〳〵なり。題ハ匡房
中納言ぞ奉ゝる。云云以上 この文まて。大ゝ物ゝと〳〵ゝ

○式乾門院御匣

ゐをさゝゝぬおれゝさよゝ思ゝ。ゝをいとゝの中もさぶねゝて〳〵
此歌ハ続後拾雑中ゝ。述懐の心ゝゝて。多くれ弱の中ゝ入り。弱乃立ハ。憂
事れ身ゝ去ぬハ。此世中ゝある人れなゝゝて。吾一人まゝ。皆
同ゝゝゝ世ぞゝ思ゝゝ。人もこのようぬ奥山の巌れ中までもゝ
づねいゝてすゝゝべゝれゝゝゝゝきハ身をゝゝれぬゝ世のなゝゝれば。
ゝれもすゝなゝゝゝゝゝゝ。大ゝゝ此人ハ。ゝるゝゝゝる弱ゝあゝれなゝ
ゝゝ多〳〵 新後拾雑三ゝ

ゝすゝれぬゝゝれ秋をおもひぬのゆゝゝゝのゝゝ峯れ

松ゝゝぜ 用書ゝ山家のゝゝゝを

きづのなるそのけいほうけよりそのあるそふ人あるべあ
ちはもをみむ　同書よざいーらず
おほつるけ　をもそうそうみだうろぐようきオまそうふなら
ひなりせバ　狂狂負多き人なしバさむくまあそれなる多るべー
式乾門院と申ハ御諱利子、後高倉院
皇尊号を奉、後高倉院と申ス の御女、四条院准母故、皇后宮と申ス、百練抄云、皇后宮御腦危急之間、御出家、為式乾門院とそうう御母北白川院基家公女也、御匣ハ作者部類ヨ、久我大政大臣通光中古六ノ集ヨ細ヒ公女とあヨ、すべて此一統歌ヨ名を得人ちまて、祖父通親、父通光、叔父通具、皆一人うて名誉なるハなし、中古歌仙、新歌仙ヨ云り　前よりいでる中納言典侍も

近き親族也、御匣殿と申ハ常寧殿の北、貞観殿の中ヨ此殿あり、御服裁縫する所也、此處を司る上臈を甚まるま御匣殿と云、大臣、或ハ良家納言女、任之、此所ハ別當ハ、御所中孔沙汰人なる由、禁秘抄ヨ見そうう

○相模

きそうもヨうつのとくびを逢ーとはかう強びなるようはるーしひも
此哥ハ後拾遺集恋二ヨ、忍びて物おもひそうるに、色ヨやもそうりけ
そうちそうそうる人、なぐの物むつのーぐるをいひ行るれバ、心のち
ヨ思ひそうるとあり、一首ハ心ハ、人志ヨ分心のうちまれそ思ヨ少なれバ
諸共ヨとけて逢事ハかーとそうを、元結びよりいひ寄て、下紐のおとそうに
ヨハあらじと心はそうちヨかそうくと思ひ行ぐそうるよーー也

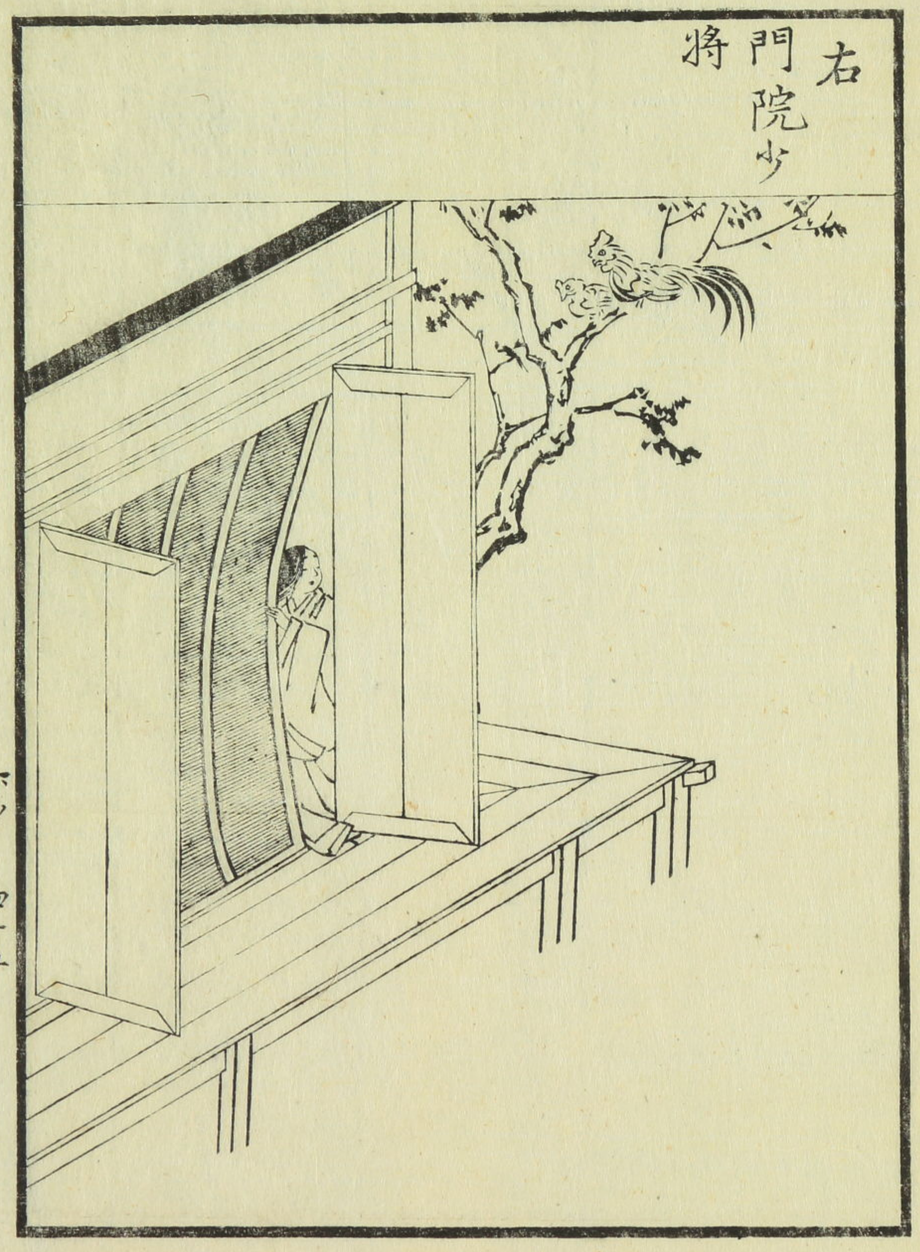
相模ハ作者部類ニ源頼光女とあり。但拾芥抄ニハ父不詳不知姓氏
とあるのいづれがしらんしるべ。大系図と合見るに頼光の女ニハ贈従三位
濟政室とある者入まして。外ニ女子ども。後拾遺集秋下ニさぐみ
ニ相ニ忘られて後。ほど家ニまゐりかよひるに。うつろひにきるきぬ
ぬぎかへばよゐある。藤原経衡。ものおもひ人の心ハたちざるれ
ぬよりさきニ物ひとしけなるぬれハ相ニまゐりて後。濟政の
室となりしるべ。相模ともいひ。乙侍従ともいひ。入道一品宮
女房也。後朱雀院の長久二年。弘徽殿の女御の歌合ニ。尤の頭つら
よりて世ニゆるされる歌人也。　後拾遺集夏ニ正子内親王
ニ繪合しゆるるに。ねのさらしに書侍る

見るにせで依れにしをみるそけのうれ色さらる玉川のさと
此ものと続世継物語ニハ正子内親王かもれいつきとやそ移ひ。此宮ハ
あなせ孫ニまゐれ。ものさけるる玉川のさとのみてのうあるハ各ぶ
かき弱ニ侍りとぞ。古今著聞集ニハ相模ゞ卯の花さらるの秀歌ニ
ハ此時也ども。

常草子ニ世講歌合時。相模所詠ニ

さみだれにうづれまこもぐきかりほに人もあらしとぞ
なるる。此歌講出之時。殿中鼓動及郭外ニ。なぐあり。披講の時。一坐
思ひ叫ぶ聲を揚て感じる。其聲殿中をゆれて。郭外の遠ニ遠き所迄
聞えしとも。尤以誉なり。うらぶれ物ニ多のうづ。意れ孔ハ
後拾遺集恋三ニ。中納言定頼。今ハさらに来じなぐいひてうつりて

龙
相撲


右
門院少
將

おもしろくなれば、つねは
来ぬとぶらいそぐらんなぞ、つねなる人のまことにぐて
ぶらん　同集恋四永兼六年内裏歌合に
うらみもとびほさぬ袖ぐちのそのと恋ふるちなむ名
そそをしられば　又同書に雑五敦貞のみこ笛ならぶそつく
吹なられば、のみみのもとに行る人のそもに、又の日よべの笛のそ
しくなのめによいひ行のはつかめるをみこけるときて、やよ
うのうつるまや、人しもとそあれ、きくらのめけるこそなど行
ぐるぞうりぐるに
いつのまにうらくなるぐきくらぐひすのえだけそめ

ようのふるを外　九ノ巻に、甚弱どもれ自在なるもの、一人
を世にぬけのでぐらう、のくれば　俗草子云、大江公資大外記所望、
者也、僉議之時、諸卿皆是幷任宜之由而小野宮右大臣云、公資懐抱相
模ヒテ秀哥案之間公事闕如欤云云諸卿解頤依之空不幷任云云以相
模為妻之比也、公資依為相模守号相模本名乙侍従云云、のくれぐ
妻、相模歌に名高のめ、故外記の望遂ざめ、八悪のめられぐ、
甚世にかばうりゆくる夏又稀也、八雲御抄云、女の歌に赤染
衛門、紫式部、相模、上古にもちぢぬ歌人とのこよくめり

○藻壁門院少将

それをぐにいろまれ命にてやをくんこひ引ものやうくて

続古今集恋四に、恋の歌は中よりてあり。一首は云、何事も心のま
ゝならぬなりけるをぞ、我命ばかりは、まことの命なれば、恋ゆゑ
まことやすく命はなきものにて、心はかなくもものをなるべし。初
句、それをぞとは、我命を指せるなり
藻壁門院と申は後堀川院皇后、四条院母、御諱邦子、光明峯寺道家
公御女也。天福元年九月崩。百錬抄云、女院御産氣日来遅々、今暁殊物
怨之間、寅刻皇子降誕、万人悦豫之処、皇子有御事、及有女院崩御、年
廿五上巳とあり。いとあはれなる御事也。少将内侍、三人兄弟(バラカラ)なるよし、前に云へり。何れもおとらぬ中に、
心ばせとある歌多し。 新勅撰恋三、百三首

おのづからきゝつけられのありぶるおもひもよらで
ものやなかるらむ　同雜百三首霞を
さびしさはまばらなりけるのまにうすむらさめもとまれるの
やのさゝら　続古今恋五
おもひのゝとうらみ分てへて恋ちなるぞのちれ世までのつら
さゝやうむ　新後撰夏
いとはなみやまもいでゝほゝぎすまちてのこゑやちつれ
きゝそめ　なぐ是ゝ皆人の口に残れる歌ども也。玉葉集
ゝゝぐ。此人ハ新三十六人集まも再びいでられ又云へ
玉葉集雜一に、なくなりなんとちかくなりてよゝ行ゝ

あるうちにもいまはなごされぬ友ちどりうちぬるのゝ名れあと
やしれぬる　此うれしうてと少將みまくうりて後弁内侍すめ
はくるよりみてけのほりる　前関白太政大臣
そのあるうかるうの浦のなちどりあとゝ志のぐぬとゝめ
まもれ　又続千載集哀傷ハ藻壁門院少將みまくうりてれ
ち人の夢ヨみゝて　あるうにも今ハなごされ友ふるうちぬき
名れあるやおゝむ是ハ　とよゝ有　とよゝ行るる別れ心を弁内侍人く
ますめてよゝもせうづうるよ　山本入道前太政大臣
なきひゝを志のぶむのしれかゝもちどり是やうゝもねふ
れうう　とみゝうう　なくなんゝちうゝ　夢ようゝえてと

もあるはいづれの品ゝうゝむいまるゝさがくうのれど玉葉の方とぞお
ぼゝき　そはとゝれ　此うれ　うちぬる名れあるやおゝむなど
少しほうゝる口つきなるは自ら心も常ようのおも
うれるゝ　うゝ
すべてうれうの女房ハ當昔といへどいのくれなる人うちなれば今の
世ようのなても及べきはあるれど女ハいきかれ夏も出榮する猶
なる色ハおれくの志ゝ少しばれうれなるはあるうきうのなり
今物語十訓抄ヨも出ル　ある殿上人ふるき宮ばらよふる紅ようのみうて北
の對ようめんぐうよゝうずうるよ房ようおうゝ人のけうきあまうゝ
けれバ引ゝのうれてのぞきうるに御房ようやり水ヨ螢のおほく

まぶきけるをみて、先(サキ)立てる女房は、螢火乱飛(ケイクワランヒトシテ)と打(ウチ)なのめるに、次(ツギ)なる人、夕殿螢飛(セキデンニホタルトンテ)と口(クチ)すさぶ。後(シリ)よりちらる人、うられぬるものを、なつもの、のこゝろやゝて、獨(ヒトリ)ぐちらり、きりぐすやけ〳〵く面白(オモシロ)く、てこの男なるもなくふ〳〵なるのんもいなくて、嵐泣(ネズナキ)をたいでこりる。先(キ)なる女ぞう、物(モノ)おそろやほゝるも聲(コエ)れありけるよりて、けやゝさらざるるきなく、ちづまりる。ひのあり色やうく、うれく笑てくる。今ひとり、なく動よりもこそとりなすこゝろ。是(コレ)も思いりるほどおくゆのうて、すゞてとりくまやちゝうりり

音(ネ)せでこそとはもある螢こそなく動よりもあるれなる色

蜀火乱飛秋已近(ニ)辰星早没夜初長(ル)夕殿螢飛思悄然

けゝめどもこゝろはの物ハ交動の牙よりあれるおもひなりけゝ

以上今物語 なゝどある心をおそひ〳〵よりなりけるなりうばりり

れることゝ男どもなるあり。こうばゝ心のとゝるゝふほどみもひ

ちまゝりれど女なればこそ、あれるも、やこゝろ物

ゆなるこゝろものなりあり終

女房三十六人歌仙下巻終

右女房三十六人図

七十四翁　高嶋千春

門人補助

高島千秋

福島隣春

同　千山

竹川千洲

大高千載

橋本彦八蔵板

学ひ其道にかなりて上手書作る人
多しかれど世を言ひらをを閑ゆるものぞ
もし一向いすれへを其道にたつ物ならば
其さしまそはひらてらそぎうてはしどくく
なむある又後の世はをいとりて何れ流れく
れは秘可申ども此ろの事八閑ゆるなくまた
そのなきことのはまあるら月日をいづらにつ
やしてとそあれ学ひむすぶ義ましたどり志

らざれば、うらやむべき事ぞかし。うぶぶかの方、
あるうちなきてうふ埋もれて、淺ましき、ゆゑの事
なれば、失ひ給ふことを、ものがきにとりつけるよいそ
ぎとも、今は書を見れば、古へ小度〳〵後の世平
らかにして、はなはだ形ある事ども、をぼえる歌
共情をうたへ、有る世共功績なうべへて、強ひ為る
も、目覚まし〳〵、空しう安〳〵、はかなきを、とり、悪き我
省きて、おひ先、それ為、更女らが、更給ちに、
境界毎、こうみとなすべく、物せられれば、
まふざせうん人、さうすまいそ、うく探ぐら
れ、るひとびも、なるべうよろこび、れをはざりづき、
物のうすぐれ書どもを、年ぬるどもに、一部、二
巻をば、巻頃ぬ、横本ま、句をせて、おまの人
世ぬりでもやさせんと、あり、おとした、たのもめ、人
ぬ、めむ、つ人、為さ人、とりそへて、うるはもご
ろあるた、強ちうも、我友、橋本安書ぬ、これ歌

[illegible]人ハ[illegible]歌言葉[illegible]老翁[illegible]これ
はそれ[illegible]清く書なされるかを[illegible]て
言葉老翁[illegible]ゆ[illegible]れ[illegible]ばさなぐら
[illegible]人[illegible]て題[illegible]せ
ら[illegible]や[illegible]永七[illegible]
[illegible]月[illegible]

上毛國群馬郡原澤文哉義教識

作者傳　巻數未定

此書ハ世代集を始め新葉集月詣集の歌人並に集中端書に見えたる人々の姓氏
を起りより賢愚得失官位昇進の次第まで一代の経歴を廣く諸書を捜索
し委細に論じられしれば其筋くまなくつうじる八職原有職律令格式
等に至るまで大方此書に漏たる事なし

歌仙部類抄　十八冊

三十六歌仙（三冊近刻　高島千春画）　後六撰（三冊近刻）　新三十六歌仙（二冊）

新世六人撰歌仙（二冊）　中古世六歌仙（三冊近刻）　女房世六人歌仙（二冊　出来　高島千春図）

釋門世六人歌仙（三冊）

此書ハ式人の志ゝめ給きて既く集めおこなれる作者傳の中より世に久しく
埋もれ来る三十六人集のうちを抜出て初学びの便りとせられる書也故に其の
歌も一首ゝ抱意を一ゝ[illegible]解れるのゝ[illegible]ゝ語注なぐさめ
傳の方も本書を省略して[illegible]月やすきさ中に物せられる[illegible]